



エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No. 5 April 1, 2021

<http://www.ses-japan.org/>

— 目 次 —

巻頭言「エコクリティシズム研究学会 26 周年を迎えるにあたって」	1
事務局挨拶	2
特別記事	
「コロナ禍における授業での格差とメンタルヘルス」	2
「コロナ禍が露呈させた ICT 環境と授業」	3
学会シリーズ本紹介	
『資本主義から環境主義へ：アメリカ文学を中心として』（藤江啓子著）	4
会員の最新紹介	6
News & Information	7
編集後記	9

巻 頭 言

エコクリティシズム研究学会 26 周年を迎えるにあたって

塩田 弘 (SES-J 会長)

エコクリティシズム研究学会の創設以来、長年にわたり代表と会長を務められてきた伊藤詔子先生から、このたびバトンを受け会長を拝命いたしました。このような大任を仰せつかったのは初めてのことで、あらためてその責任の重さを感じております。

1995 年に小さな研究会として始まった本学会は全国的な学会へと発展し、昨年には創設 25 周年（四半世紀）の節目を迎えました。世界ではコロナ禍の中でいまだ出口の見えない状況にあります。長い歴史の中で人類は様々な感染症を経験しており、それが文明の大きなターニングポイントにもなってきました。エコクリティシズム研究学会でも近い将来にコロナ禍をテーマにした研究発表やシンポジウムが開催されることもあるでしょうが、今後は学会自体も更なる節目に向けての展開を目指すものと思います。そのためにも、会員みなさまのお知恵を拝借し、ご協力を仰ぎながら一歩ずつ活動してまいりたいと考えております。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

事務局挨拶

事務局長就任のご挨拶

菅井大地（松山大学）

2021年度より事務局長に就任しました菅井大地と申します。本学会の会員になってまだ3年目ですので、「お前は誰だ？」と思われる方も多いのではないのでしょうか。1988年に石川県で生まれ、三重県で育ち、学部は金沢、大学院は名古屋と、主に中部地区で生活しておりました。2018年に松山大学に着任しました。それまでは名古屋大学の博士課程で学んでおりましたが、中四国地区への赴任が決まったことを指導教員に報告したところ、「広島を中心に環境批評の学会があるはずだからそこで厳しく鍛えてもらいなさい」とのこと。着任早々、吉田美津先生にご推薦をお願いして入会するに至りました。これまで2度の大会と、オンラインでのワークショップに参加いたしましたが、先生方の英語圏文学および環境批評理論に関する深い議論からは大いに学ばせていただいております。

研究面では、主に20世紀のアメリカ文学、特にカリフォルニアを描いた作品や、カリフォルニアと縁のある作家を環境批評の観点から考察する作業を続けていますが、まだまだ勉強不足を痛感する日々ですので、学会での活動を通して精進したいと思います。

これまでの事務局の先生方のきめ細やかな仕事を引き継ぐにあたり、私などでは力不足ではないかと心底案じていますが、スムーズな学会運営に微力ながら貢献できればと思う次第です。至らぬ点多かろうと思いますが、何卒よろしくご挨拶申し上げます。

事務局委員就任のご挨拶

岸野英美（近畿大学）

このたび事務局委員（主として会計担当）を拝命いたしました。昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、日常生活が一変しました。日に日に世界で増加する感染者の数の恐怖を感じながら、教育現場では慣れない遠隔による取り組みに戸惑い、苦戦しました。一方で、この未曾有の災禍に、環境文学研究の重要性を改めて感じ、僭越ながら本学会の役割を考えるようになりました。ワクチンの完成によって、ようやく収束の兆しが見えてきた今、さらに活発な学会をみなさまとともにつくっていくために、微力ながらお力添えできましたら幸いです。どうぞ宜しくお願いいたします。

特別記事

コロナ禍における授業での格差とメンタルヘルス

原田和恵（マイアミ大学、オハイオ）

学生と面と向かって授業したのは、遠い昔のような気がする。2020年1月末から春学期の授業が始まった時点では、新型コロナウイルスは遠い世界の話と思っていたが、6週間後の3月半ばにはオンライン授業に変わり、現時点でもその状況が続いている。オハイオ州は先手を打ってウイルスに対応したものの、休暇がある度に感染者数増減の波を繰り返している。

2020年3月に急にオンライン授業に変更した際、学生も教師もパニックに陥った。特にオンライン授業に慣れていない教師は次の日からどう授業を進め、どう学生の評価をすべきかと戸惑った。だが、それ以前にオンライン授業で問題になったのが、学生の経済格差だ。コンピューター等のオンラインで使えるデバイスを持っているか、インターネットのアクセスと勉強する場所や時間が確保できる環境が整っているか等、普段の授業では目に見えなかった格差や家庭環境問題が浮き彫りにされた。これを受けて大学は、秋学期に向けて格差緩和の対策を取り、オンライン同時進行授業を推奨した。とはいえ、全ての学生が万全の体勢で授業に臨めたわけではない。また、教師側もオンライン授業の環境が整っていたとは言い難い。まず、授業内容の録画やオンラインミーティングのソフトウェアは何がいいか、日本語の手書き練習をデジタル上でどう採点するか試行錯誤しながら、必要なデバイスを購入しなければいけなかった。

オンライン授業での大きな課題は、学生の学習意欲向上や健全なメンタルヘルスの維持である。自宅にいても、寮にいても、気が散ることが多く、集中力を持続させることが難しい。また独り暮らしだと孤立してしまうことが多い。春学期は急遽非同時進行授業になったため、私は授業の録画や提出物の採点に追われた。学生の方も、オンラインになって書く量が増え（ある意味、サボることができなくなった）、授業についていくのに精一杯のようだった。また、ウィルスによる隔離や人との繋がりが少なくなってしまったことも、モチベーションに影響していたようだ。秋学期は同時進行オンライン授業だったが、同様な問題が起こった。ただ日本語101の授業は話すことが中心だったため、コミュニケーションの点ではよかったが、最初はお互いを知らないで、オンラインで間違えることへの恐怖感を抱き、特に間違いを直されることに慣れていない学生はかなり抵抗があるようだった。間違えることは言語習得に繋がり、授業でのバーチャル空間は練習するのに安全な場所だということを常に強調しなければならなかった。だが、コンテキストから言語を教えるのは限界があり、普段なら説明不要でも、なかなか伝わらないことも多々あった。そのため、私の方は普通に輪をかけて準備時間が増え、コミュニケーションにも細く気を配らなくてはいけなかったので、授業後の疲労感が倍増した。また、学生が常にオンラインにアクセスできるため、テストの評価基準を変える必要があり、教科書等を見ても実力が試されるものを作らなくてはいけなかった。オンラインでの評価基準は、まだまだ試行錯誤の段階であり、満足したものが出来たとは言えない。

コロナ禍の授業では、学生の格差緩和、メンタルヘルス維持が大事である。それに教師のメンタルヘルスやセルフ・ケアも決して忘れてはいけない。バーチャル授業では、通常より学生と教師間、学生同士のコミュニケーションが必要であり、学習や精神的にも安全な空間を確保することの重要性を再認識させられた。

コロナ禍が露呈させた ICT 環境と授業

真野 剛（海上保安大学校）

2020年3月11日、WHOは中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がパンデミックであるとの認識を表明した。奇しくもその9年前に、一瞬にして多くの尊い命を奪った東日本大震災と同じ日であった。国内でもすでに2月から感染拡大が始まっていたが、政府は2020年4月7日に首都圏など7都道府県に対して緊急事態宣言を発令し、16日にはこれを全国へと拡大した。厚生労働省の報道資料によると、同日8,582人であった感染者は、今や50万人にも届きそうな気配である。

手洗い、マスク着用などの衛生対策とともに、繰り返し叫ばれたのが3密回避であるが、最も困難な状況に立たされた一つが教育現場であった。COVID-19の脅威を前にして全国の学校が閉校や入構禁止措置などを行う中、全寮制である本務校がその性質故か閉鎖や休講もせず、多少の換気と座席間隔を広げた上で、従来通り授業をする以外に対策を見出せなかったのに対して、非常勤先の看護学校の対応は感嘆に値するものであった。全教員が現職の看護師から構成される専門家集団は、管理者の指揮の下、見事なまでの対策を講じた。卒業式・入学式といった式典の入

場者制限を早々に決断し、オンラインで授業を行うことにシフトした。幾分か県内の感染者数が緩やかになった時期であっても気を緩めることはなかった。感染状況を絶えず探りながら、通学者には自宅からのオンライン授業を継続し、並行して入寮者には十分な間隔を空けた上での教室受講とし、オンライン会議システムで相互空間を繋ぐという授業形態なども構築した。さらに、通学が必要な場合であっても、時間割を組み換えて学年を区切って交互に通学させることで、最大限学生同士の接触の機会を減らす工夫も行った。小規模校であるためシステムエンジニアや情報の専門家は一人として在住しておらず、オンラインシステムの導入に関しては、聞けば教員が一丸となって情報を集め、毎日、シミュレーションなどを通じて試行錯誤しながら実現させたものであった。普段と比べて困難な状況にあっても、工夫によって全員を国家試験合格へと導いた。

その一方で、自宅のオンライン環境は誰しもが整備されているわけではなく、全国的にも特に一人暮らしをしていた学生はデータ通信容量の問題で悩まされたであろう。映像の送受信はかなりのデータ通信量を必要とし、人によっては瞬く間に通信契約容量の上限がきてしまう。2001年に日本政府が打ち立てた「e-Japan 戦略」は、2005年までに世界最先端のIT国家となるよう目指すというものであった。2006年には無線技術を基盤とするユビキタス社会を目指し、コミュニケーションを折り込んだ「u-Japan」へと昇華した。確かに大容量通信を可能にするブロードバンドは普及し、モバイル端末でも手軽に映像などを楽しめるようになったが、それは整えられた条件下でのみ可能であり、まだ“誰しもが不自由なく利用できる”わけではない。スイスに拠点を置く国際経営開発研究所(IMD)が2020年に発表した「IMD世界デジタル競争ランキング」では、日本は順位を前年より4つ下げ、対象63ヶ国中、総合ランキング27位と良いとも悪いとも言い難い評価であった。東南アジア13カ国の中でも、シンガポール(2位)や香港(5位)の目覚ましい評価に比べて9位であり、最先端どころか随分と他国に後塵を拝していることが分かる。ランキングは知識、技術、将来への対応の3つの要素で評価される。技術面として、小区分のMobile Broadband subscribers「携帯ブロードバンド契約者」(1位)、Wireless broadband「ワイヤレスブロードバンド」(2位)では高い評価を得ているのだが、将来への対応に関する小区分Agility of companies「企業の敏捷性」(63位)やUse of big data and analytics「大容量データの利用および分析」(63位)ではともに調査対象国の中で最下位であった。今から10年ほど前、日本ではまだWi-Fi環境が限られていた頃、アメリカではどのモーターに行っても当たり前のようにWi-Fiが整備されていたことに驚いた。そのアメリカは総合ランキングにおいて1位である。

COVID-19はウィルスの恐ろしさとともに、ニューノーマルに即した各国のデジタル化への対応、ICT環境整備への進捗状況を露呈させた。国内携帯事業大手3社もようやく通信容量の大容量化と値下げを始めたが、設備機器のハード面と同時に、それらを最大限に活用できる環境を整える組織の姿勢といったソフト面の強化が極めて重要であると感じた1年であった。

学会シリーズ本紹介

エコクリティシズム研究のフロンティア 6

藤江啓子著『資本主義から環境主義へ——アメリカ文学を中心として』
(英宝社、2016年)

辻 祥子(松山大学)

資本主義から環境主義への転換は一つのパラダイムシフトであり、地球環境問題が強い関心を集めるようになった近年に起きたものであるという認識は、故藤江啓子氏のこの著書によって覆される。そもそも、パラダイムシフトとは、「ある時代・集団を支配する考え方が、非連続的・劇的に変化すること、思想の枠組みの変動、社会全体の価値観の移行」のことを指す(大辞泉)。しかしながら、アメリカにおける環境主義の思想は、実は資本主義の歴史の初期の段階ですでに芽生え、多くの思想家や作家、そして社会活動家によって受け継がれ、さまざまな圧力に抗しながら発展してきた。その思想は、まるで一本の樹木のように長い時間をかけて成長し、今や大地に

深く根を張り、その枝葉を大きく広げるに至っている。藤江氏が多くの文学作品や評論を駆使し、緻密な論考を幾重にも重ねながら浮かび上がらせたのは、そのような環境主義の歴史である。

第1章で著者は、アメリカの環境主義の歴史全体を、個々の文学作品や環境保護運動を紹介しながら概観する。第2章では、アメリカの資本主義が、節制、勤勉を美德とするプロテスタントの精神を受け継ぎ、中産階級を担い手にして発展しながら、一方で個人主義に基づいた自由な利益追求を促すようになる過程を明らかにする。さらにミルトンの『失樂園』(1667)をそのような資本主義の精神を反映した作品の好例として紹介し、『『主流的樂園回復のナラティヴ』は『進歩』とか『文明化』という意味では科学や経済を発展させ上昇の一途をたどるが・・・自然環境や女性、アフリカ系アメリカ人、ネイティヴアメリカンの視点からは下降の一途をたどった』(51)と結論づけ、その弊害を重視している。

第3章以降、著者はそういった資本主義を問題視する人たちの中から環境主義の意識が芽生えていくことに注目する。第1章では、その原点はエマソンとソローにあると論じていたが、第3章、第4章では、クレヴクールとホイットマンがそれぞれグローバルな規模でのアメリカの産業力の向上を称賛しつつ、一方ですでに環境破壊にたいする危機意識を持っていることを詳しく論じている。

テーマの核心に入っていく第5章、第6章では、環境主義にジェンダーの視点を加えた作品に注目している。具体的には、ほぼ同時代に書かれたレベッカ・デイヴィスの「製鉄工場の生活」(1861)とメルヴィルの「乙女たちの地獄」(1855)を取り上げ、それぞれの作品に描かれた女性工場労働者の環境を中心に、優れた分析をしている。とくに「乙女たちの地獄」の中で、人里離れた製紙工場を訪れた男性の語り手が、自分を襲う寒さに気を取られて、劣悪な環境によって体を蝕まれていく女工たちの本当の苦しみまでは気が付いていないという藤江氏の指摘は鋭い。藤江氏はこの第5章、第6章において作品の中のさまざまな表象の意味を読み解くことで、作家たちが環境問題にジェンダーの問題をどのように関連づけ、現状を批判しているかを明らかにしている。

さらに第7章は、メルヴィルの別の短編「ピアザ」(1856)を取り上げ、一見ロマン主義やパストラリズムの愛好家が好みそうなピクチャレスクでサブライムなバークシャー地方の風景の中に、貧しい女性が住む荒廃した土地の風景が潜んでいるという設定から、メルヴィル独自のアメリカ風景論を読み取っている。そこを訪れ、女性の苦境の現実を敏感に感じ取る男性の語り手は、「所有欲を伴うパノラマ的視線」(藤江 149)が見逃していた風景の深層にまで達することができるのであり、その点では「乙女たちの地獄」の語り手と対照的だが、結局彼自身、自らを危険にさらすことなく安全な場所に戻ってしまうという点で限界があると解釈している。

第8章、第9章は、環境主義に関する特定のテーマのもとで、19世紀の作家と現代の作家がどのように結びついているのかを考察している。第8章では、ケーブコッドの描写をめぐって、ネイチャーライティングの始祖であるソローと、彼の影響を受けた多くの現代作家のうち、ロバート・フィンチを比較し、その共通点を探っている。具体的には、彼らがともにケーブコッドを陸と海の間のエッジ=境界とみなし、そこを周遊しながら、円環構造を持つ四季の巡りを感じ、その土地を多民族・多文化の共存の場、生き物の生死のサイクルが繰り返される場とみなして描写してきたことを挙げている。二人の共通点を論証することで、ケーブコッド文学の伝統、ひいてはネイチャーライティングの伝統を浮き彫りにしようとしている。

最終章となる第9章は、前章と似たような手法を用い、今度は海の捉え方において、19世紀のロングフェローやメルヴィルと、現代のニュージーランド詩人であるイアン・ウェッドを比較している。ここで藤江氏が論じている三者の関係性を紹介しておきたい。ロングフェローとメルヴィルはともに海を人間の魂と結びつけてロマンチックなもののみならず一方、メルヴィルのほうは、海が「グローバルな資本主義の共有地」(藤江 188)にされ、海洋における資源の搾取や環境破壊が起きていることに気づいていた。また、メルヴィルとウェッドは、ともにニュージーランドの先住民マオリ族に関心を有する。最近のサンボーンによる研究によると、メルヴィルは『白鯨』(1851)の重要人物で、自然災害から生き残り、自然とともに生きる知恵を備えているクイークエッグの原形をマオリ族に求めていたと考えられるという。一方でウェッドは、マオリの先祖伝来の海を基盤とする文化が、経済的グローバリゼーションによって脅かされていることに警鐘を鳴らすため、仲間の作家や芸術家とともに作品を発表したり環境保護活動をしたりしている。メルヴィルとウェッドを繋げる藤江氏の論はユニークである。藤江氏は、この二人にロングフェローを加えた三人の共通点として、文明に毒されない先住民の知恵に注目していることや人間の能

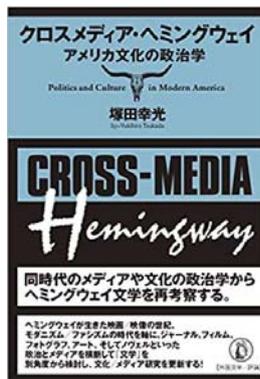
力が及ばないような自然（宇宙）の力を認識していることを挙げている。

このように、これまで多くの作家や思想家が、資本主義が自然にもたらす弊害に危機感をもち、自然との関係を原点に戻って再構築しようと努力してきた。そうした作家や思想家が時空を超えて結びつき、環境主義の歴史を作ってきたとあってよい。最後の第8章、第9章はとくにその歴史の重みを実感させるものとなっている。

藤江啓子先生のご冥福を心よりお祈りしたい。

会員の最新紹介

メーリングリストで紹介された会員の単著です。



『クロスメディア・ヘミングウェイ：アメリカ文化の政治学』

塚田幸光著（小鳥遊書房）

発売日 2020年4月6日

四六判 306ページ

定価 3000円＋税

同時代のメディアや文化の政治学からヘミングウェイ文学を再考察する。ヘミングウェイが生きた映画／映像の世紀、モダニズム／ファシズムの時代を軸に、ジャーナル、フィルム、フォトグラフ、アート、そしてノヴェルといった政治とメディアを横断して「文学」を別角度から検討し、文化／メディア研究を更新する！（出版社HPより）



『快樂としての動物保護 「シートン動物記」から「ザ・コーヴ」へ』

信岡朝子著（講談社選書メチエ）

発売日 2020年10月9日

四六判 408ページ

定価 2200円＋税

私たちは、絶滅が危惧される動物や虐待される動物に胸を痛み、動物を大事にするのはよいことだ、と信じています。しかし、そうした考えの起源は意外に新しいものです。誰もが子どもの頃に手にした『シートン動物記』の著者、テレビ番組の取材中にヒグマに襲われて死去した写真家、そして和歌山県太地町の伝統的なイルカ漁を糾弾する映画—三つの事例の向こう側に控える時代背景、交錯する思惑、政治的意図、イデオロギーを詳細に追求していく本書は、私たちの常識を心地よく覆します。気鋭の著者が書き上げた読者への挑戦状！（「BOOK」データベースより）



『ツナミの年』

ジュリエット・コーノ著／牧野理英訳（小鳥遊書房）

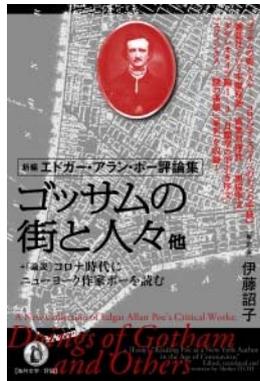
発売日 2020年10月26日

A5判 244ページ

定価 2400円＋税

「災害から三年たって／私がいまだにやろうとしていることとは／（中略）／星と波の間の大きな距離を泳いだように感じる。／（アツコー星と波の間で）」。ハワイの日系アメリカ人作家が描く、死に寄り添った3部から成る美しい表紙の詩集である。コーノの名作『Anshu 暗愁』は、2015

年 SES-J 大会ワークショップでも取り扱い、会員に感銘を与えた。記者あとかきでは「ローカルとは一体何を意味しているのか」という根本的な問いをつきつけられる。(中略) コーノの描く哀しみは、万人が経験する哀歌を起点」と語られる。



『ゴッサムの街と人々他』
【新編エドガー・アラン・ポー評論集】 ゴッサムの街と人々 他
+ 【論説】 コロナ時代にニューヨーク作家ポーを読む
伊藤詔子 編・訳・著 (小鳥遊書房)
発売日 2020年12月10日
四六判 200ページ
定価 2000円+税

ニューヨークが「マガジニスト・ポー」をいかに生み出したのかがわかる重要な幻のニューヨーク論「ゴッサムの街と人々」をはじめ、あの「黒猫」に付された序文「直感対理性」、そして科学的評論「貝類学序文」「ダゲレオ論」等これまで重要でありながら翻訳されてこなかったポーの知る人ぞ知る評論を、ポーのニューヨーク・コレラ禍を描いた「スフィンクス」論・「コロナ時代にニューヨーク作家ポーを読む」等、ポー新編・新訳を論文付きにてお届けします。

(https://www.fukkan.com/fk/CartSearchDetail?i_no=68328670 より)

News & Information

◆◆◆◆ 大会報告 ◆◆◆◆

ワークショップ報告

2020年8月8日(土) 10時00分~11時30分

Zoomによるオンライン開催

浅井千晶 (千里金蘭大学)

2020年8月8日(土)には本来、西南学院大学で第33回大会が予定されていたが、新型コロナウイルスによるパンデミックで年次大会を見送ることになった。この状況の中、大会プログラムの一部であったワークショップ「Weirding Ecology——異化のエコロジー」をZoom利用のオンライン形式で開催することができたのは幸いであった。

最初に司会・発表のデビッド・ファーネル氏が“The Ecological Weird in Jeff VanderMeer’s *Southern Reach Trilogy*”の題で合衆国南部に突如出現した謎の領域〈エリアX〉をめぐる三部作を論じ、次に渡邊真理子氏が“Where Seductive Fungi Spread: Contextualizing Cold War Japan in Ishiro Honda’s *Matango* and W. H. Hodgson’s ‘The Voice in the Night’”の題で本田猪四郎の特撮映画『マタンゴ』における菌類(キノコ)と変身の表象を分析された。最後に岸野英美氏が“The Weird World and Non-Human Beings in Hiromi Goto’s *Half World* (2009)”の題で、日系カナダ人作家ヒロミ・ゴトーの作品に描かれる「人間ならざるもの」の象徴性を考察された。

本学会では初のオンライン開催の試みで、塩田弘会長補佐がZoom会議の入場設定から広報、事前の操作演習の場まで、入念に準備してくださった。ワークショップの司会のファーネル氏には他の発表者との連絡や調整、Google Docを利用したQ&Aフォームの作成など、オンライン開催で十分なコミュニケーションを取るためにさまざまな工夫をしていただいた。ワークショップ当日は多くの会員と数名の非会員が場を共有し、スクリーンいっぱいに広がるパワーポイントの文字や画像はわかりやすく、映像も鮮明で、オンライン開催の学会の可能性を感じることができた。質疑応答も音声とチャット機能を利用してたいへん活発に行われ、有意義な時間となった。

このワークショップの原点は2018年9月に遡る。当初、キャサリン・ビショップ氏とファー

ネル氏から提案があり、2019年大会のシンポとワークショップのテーマはすでに決定していたので、2020年大会の企画として実施していただくことになった。3人目の登壇者に渡邊氏が決まり、ワークショップの姿が見え始めた2020年2月、ビショップ氏がアメリカに帰国されることになり、岸野氏に急遽あらたに参加していただくことになった。

幾多の試練を経て、関係者一同の努力により待望のワークショップが実現したことに心から感謝しています。

◇◆◇◆ 2021年度大会情報 ◇◆◇◆

エコクリティシズム研究学会大会

日時：2021年8月14日（土） 10時00分～17時10分

場所：オンライン開催（Zoom ミーティング形式）

総合司会 三重野佳子

10：00 開会の辞 塩田 弘 会長

10：10～11：10 ワークショップ

「Blue Humanities—*Wild Blue Media* (2020) を読む」

（◎菅井大地、伊藤詔子、浅井千晶）

11：10～11：20 10分休憩

11：20～12：30 研究発表（各発表25分、質疑10分）

研究発表1： 11：20～11：55

林千恵子

「地名研究は何をもたらしたか—アラスカで進む地名変更の背景（仮）」

（司会：深井美智子）

研究発表2： 11：55～12：30

小杉世

「クリスマス島の英米核実験と除染をめぐる—キリバス民間人の視点から（仮）」

（司会：松永京子）

12：30～13：00 昼食

13：00～15：00 シンポジウム

「『トランスパシフィック・エコクリティシズム』をふりかえる」

（◎一谷智子、牧野理英、湊圭史、コメント：芳賀浩一）

15：00～15：10 10分休憩

15：10～16：20 特別講演

講師：高橋 勤先生 [九州大学教授、日本ソロー学会前会長]

「自然保護という思想—ソローからジョン・ミュアへ」

（司会：大島由起子）

16：20～17：00 総会

17：05 閉会の辞 松永京子 副会長

◇◆◇◆ 各種委員会からのご報告&お願い ◇◆◇◆

☆（国際）広報委員より☆

会員の出版（単著・共著）・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストとHPでお知らせしますので、出版・学会については塩田弘宛て（shiotah(*)shudo-u.ac.jp）に、書評については大野美砂宛て（misa(*)kaiyodai.ac.jp）にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページ上に掲載する以下の記事を常時受け付けています。三重野佳子宛て（mienon(*)nm.beppu-u.ac.jp）にご連絡ください。

- (1) 「旅する会員」ページ：皆様の旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒にお寄せください。ページに載せる形に整えてワードファイルあるいはPDFファイルでお送りください。
- (2) 「エコクリティシズムのテーマの概要」で、現在のテーマの他にご提案がありましたらお寄せください。出版計画委員会で掲載を検討します。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費4000円（学生会員3000円、シニア会員2000円）のご納入をお願いいたします。なお、2021年度の年会費につきましては、2021年4月に事務局が移転するため、振込用紙を2021年5月上旬に郵送、納付期限を2021年6月末日といたします。（年会費を2年間未納の方は、会員資格を失うことになりますので、ご注意ください。）

4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2000円になります。ご希望の方は、新事務局の岸野英美宛て ([hkishino\(*\)bus.kindai.ac.jp](mailto:hkishino(*)bus.kindai.ac.jp)) まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願いいたします。ご寄附については差支えない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

●住所、所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、ご住所やメールアドレス・ご所属先等に変更があった方は、レビューの発送準備等がありますので、早目に岸野英美宛て ([hkishino\(*\)bus.kindai.ac.jp](mailto:hkishino(*)bus.kindai.ac.jp)) までご連絡下さい。

編 集 後 記

今年もまた春が巡ってきました。新型コロナ発生で新学期からその対応に目まぐるしかったのがちょうど1年前でしたが、アメリカの大学の状況も同じだったことを今回の記事で知りました。この4月はSES-Jの役員交代となり、会長、事務局のご挨拶のほか、オンライン開催となった昨年のワークショップの様様、急逝された藤江啓子前副会長のご著書の書評など、ご多忙中、ご寄稿頂いた会員の皆さまに感謝致します。2020年度に出版された単著もご紹介しましたが、研究を通して閉塞した社会状況を切り拓いておられるような気がし、感銘を受けました。我々2人も新たにニュースレター編集をすることになりましたが、第1号からの充実したニュースレターの伝統を引き継ぎ、会員の皆様に喜んで頂けるようなニュースレター編集を心がけてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。(A. M.)

この度ニュースレターを担当することになりました。コロナウィルスの猛威は、瞬間に我々の日常を様変わりさせ、生活や仕事に大きな影響を与えました。感染リスクを下げるため、リモートワーク、テレワークといった新たな労働形態がニューノーマルとして浸透していきました。環境の変化に適應するため、会員の皆様も大変な1年を過ごされたことと思います。そうした中、皆様のご協力により、無事にNo. 5を発行することができました。急なお願いにも関わらず、お忙しい中、執筆を引き受けてくださった方々には、心より感謝いたします。NLは今号よりオンライン上での公開となりますが、これまで同様に皆様にとって有意義なものにしていきたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。(G. M.)

エコクリティシズム・ニュースレター No. 5

会 長	塩田 弘 (広島修道大学)	発行日	2021年4月1日
発行元	エコクリティシズム研究学会	編 集	水野敦子 (山陽女子短期大学)
事務局	エコクリティシズム研究学会事務局		真野 剛 (海上保安大学校)
	〒790-8578 愛媛県松山市文京町4番2		
	松山大学経済学部 菅井大地研究室		
	dsugai(*)g.matsuyama-u.ac.jp		

(スパム防止のためメールアドレスの(*)は@に変えてください。)